

「モナ・リザ」論考

一 條 貞 雄

Who is the model for *the Mona Lisa* ?

ICHIJOH Sadao

The model for the famous painting called *the Mona Lisa* drawn by the Italian Artist, Leonardo da Vinci, was thought to be a lady named Mona Lisa, who was the wife of Francesco del Giocondo of Florence, and this painting has been called *La Gioconda* or *the Mona Lisa*. Today, however, there are many theories about the model for *the Mona Lisa*, but the tendency is to think that Leonardo might not have drawn a real person but rather his image of an ideal woman.

The author is of the opinion that Leonardo might have drawn a real woman. The reason is that recently the author noticed that Leonardo drew a very small wart-like exanthema on the face of *the Mona Lisa*. He drew it between the left side of the nasion and the inner angle of the left eye. This fact can be considered as evidence that Leonardo did not draw an ideal woman, but rather a real person.

Leonardo met a woman called Caterina in Milan in 1493, who it is thought was regarded as Leonardo's mother. In those days, when Leonardo was 41 or 42 years old and his mother was 63 or 64 years old, he might have used his mother as the model for *the Mona Lisa*. Therefore it could be expected that the painting would show an older woman. However, it would have been easy for Leonardo to draw his old mother as a younger and more beautiful woman. Thus, *the Mona Lisa's* smile may be his mother's smile.

Key words : Leonardo da Vinci, *the Mona Lisa*, *La Gioconda*, mother

はじめに

仙台大学では「人間学」という授業があった。それは健康福祉学科2年生の授業であり、平成8年から開始され、カリキュラムの変更に伴って平成13年1月で終了した。6コマ（1回90分、6回）からなるオムニバス（順番制）形式の授業であり、担当教員にとってはそれぞれに創意・工夫を要する科目の一つであった。筆者はメンタルヘルスの観点から「人間の精神の発達」をテーマとした授業を行ない、心理学・精神医学関係の有名な人物を題材にしたりした。たとえば精神分析家のフロイド、人間性心理学のマズロー、『死の瞬間』を書いたキューブラー・ロスなどを取り上げた。学年によってはテーマ

を変更し、日本人として新渡戸稲造、また『旧約聖書』に出てくるアブラハム、モーセ、ダビデなどをテーマにし、その人たちの人間像について、今日のメンタルヘルスの考え方を加味した解説を行った。

しかし、これらの授業内容について、そのまま学生に試験を課すことは難しいと考えられたので、学生には授業とは別に、各自で興味を持つ人物を選び、指定した項目を調べて、原稿用紙5～7枚程度でレポートを提出してもらった。指定した項目とは、①姓名、②生年・生地、没年・没地 ③時代背景、④家族関係、⑤生育・教育歴、⑥職業・社会的活動歴、⑦性格・趣味・宗教・友人関係、⑧健康状態、⑨晩年の生活、⑩死の原因などであり、さらに調べた文献も記

載してもらった。

学生がレポートを作成するにあたり、筆者がその見本を作ったのであるが、その人物の例として、学生には知識として役立つような人物であり、その人物を解説する場合に視覚的な効果をもつような例がよいと考えて、レオナルド・ダ・ヴィンチを選んだことがある。見本の原稿を作りながら、レオナルド・ダ・ヴィンチの画集などを見ていたときに、筆者がふと気がついたことがあった。それはレオナルドが少年時代にフィレンツェの美術・彫刻家ペロッキオの工房に弟子入りするのであるが、親方のペロッキオが彼をモデルにして作ったと言われる「ダビデ像」があり、それを写真で見ると、口元の辺りがなんとなく「モナ・リザ」の顔に似ているのである。そこで、もしかして「モナ・リザ」のモデルとは、案外自分の母親ではないのかと思いつき、筆者が考えた“母親説”（一條 2000, 2001）を紀要の論文テーマにすることにした。そこでまず、レオナルドの生い立ちやその生涯、またこの「モナ・リザ」の絵の歴史を概観する。

1. レオナルド・ダ・ヴィンチの生い立ち

1) レオナルドの出生と幼年期

レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) (1452 ~ 1519) の伝記としては、セルジュ・ブランリ (Serge Bramly) のものが詳しい (ブランリ 1996, Bramly 1995)。彼はフィレンツェの近くのヴィンチ村で生まれた。父はセル・ピエロ・ダ・ヴィンチといい、25歳でフィレンツェで公証人をしていた。カテリーナという22歳の土地の娘と親しくなって、二人の間に生まれたのがレオナルドである。しかし、祖父の反対のため二人は結婚せず、父は別の女性、16歳のアルビエーラ・ディ・ジョバンニ・アマドーリと結婚した。どこの国にでもよくある話である。

レオナルドは未婚の母カテリーナに育てられるが、後に1歳頃とも5, 6歳頃とも言われる

が、父方に引き取られ、非嫡子（私生児）としての人生を歩むことになる。しかし、継母アルビエーラには子がなく、レオナルドはこの育ての母に大層可愛がられたという。生みの母、カテリーナもその後、他の男性と結婚したが、彼女の嫁ぎ先とレオナルドの住む家とは、子どもの足でも歩いて30分くらいの距離であり、親子が会うことはできただろうと言われている。

2) レオナルドの青年期から晩年

レオナルドが17,8歳のころ、フィレンツェのペロッキオの工房に預けられた。彼には元々絵の才能があったと考えられ、工房で手伝いをしながら名を挙げ、20歳で親方になる。やがて独立してからは、フィレンツェから、ミラノ、ふたたびフィレンツェなど何カ所か遍歴をたどる。最後は1516年頃フランスの王、フランソワ一世の庇護を受け、フランス領アンボワーズで過ごすことになる。当時、フランソワ一世はわずか22,3歳、レオナルドは64,5歳である。フランソワ一世は自分の肖像画でも描かせようと考えたのかも知れない。

レオナルドには弟子のフランチェスカ・メルツィと召使いが同行しており、3点の絵を携えていた。1519年、67歳で彼はその地で死亡する。死後、その3点の絵がフランソワ一世によって買い取られるが、そのうちの1点が「モナ・リザ」であり、その絵には非常な高額が支払われたという。なお、他の2点は、「洗礼者ヨハネ」と後に述べる「聖アンナと聖母子」である。

2. 「モナ・リザ」の歴史

1) 「モナ・リザ」の命名の由来

この絵のことについて、本邦では下村寅太郎による著書が詳しい (下村 1974)。それによると、「モナ・リザ」の存在が知られるようになったのは、レオナルドの死後、30年も経ってからのことであるという。1559年、自分自身が画家でもある美術史家ジョルジョ・ヴァザーリ (1511 ~ 1574) の『ルネサンス画人伝』(ヴァ

ザーリ 1982) に、レオナルドやこの「モナ・リザ」の絵のことが述べられている。そこでは、レオナルドがフィレンツェ共和国の高官フランチェスコ・デル・ジョコンドのために、モナ・リザと呼ばれる彼の妻の肖像を描くことを引き受けたことが述べられている。このことから、1625年、カッシャーノ・デル・ポッツォによってこの絵が「モナ・リザ」とか、「ラ・ジョコンダ」と呼ばれるようになったという。なお、「モナ」とはマドンナのこと、「リザ」とはエリザベス、エリザベッタの愛称である。

2) 「モナ・リザ」の“再発見”

先に述べたように、この絵はフランソワ一世に買い取られたが、その後、ルーブル宮などの倉庫にしまわれていた。しかし、そのうちにどこの誰によって描かれたものかもわからなくなり、その保存状態も悪かったということである。この絵がレオナルドによる名画であることが知られるようになったのは19世紀末のことで、美術批評家テオフィール・ゴージェやウォルター・ペイターによる“再発見”以来のことであるという。そして、一般に公開されるようになったのは、フランス革命後にルーブル宮が美術館になってからの1871年で、レオナルドの死後400年近くも経ってからのことになる(下村 1974)。

3) 「ジョコンダ説」に対する疑問

この“再発見”後にわかってきたことは、この絵のことを書いたヴァザーリは、レオナルドが死んだ時には、まだ8歳であり、また、「モナ・リザ」についての記述も実際のものとは合致しない点があるという。そこで、彼の記述は伝聞によるものと考えられ、その内容には疑問が持たれるようになってきた。

もっとも、モナ・リザという女性は実在の人物であることが確かめられたが、この絵の制作年が1500年から1506年頃と考えられており、その頃モナ・リザという女性は、21歳から28歳ということになるという。しかし、絵のモデルはどう見ても中年の女性であり、年齢的に合

わないことになる。そのようなことなどから、本邦でも少なくとも昭和40年代からは「ジョコンダ説」は疑問視されるようになり、最近ではほとんど否定的ときえ言えるようである(西岡 1994, ヴェッツォシ 1996, 中丸 1998, 森村 1998)。しかし、今日でも久保のように、「ジョコンダ説」を強く主張する人もいるようである(久保 1994)。

「ジョコンダ説」の他に、ある特定の人物をモデルに考える説として、本邦では田中英道(1978)が「イザベラ・デステ説」をとっている。イザベラ・デステとはマントヴァ公爵夫人であり、レオナルドは彼女から肖像画を描くことを何度も依頼されており、彼女を横からみた姿をデッサンしている。このデッサンの絵が「モナ・リザ」に似ていることから「イザベラ・デステ説」が論じられるようになる。田中はこの横顔のデッサンと斜め向きの「モナ・リザ」の顔、目鼻、手の高さの比率が一致することを指摘し、「イザベラ・デステ説」を主張している。しかし、西岡(1994)は身体の比率が一致することを同一人物とするというのは、その根拠としては弱いのではないかと述べている。また、このデッサンは彼女を描いたものではないとか、そもそもこれはレオナルドが描いたものではないとする批判もあるという(瀬木 1998)。さらに、デッサンは存在するが油彩画はないことなどから、「イザベラ・デステ説」を支持する考えはあまり見受けられないようである。

4) 「モナ・リザ」のモデルの最近の説

それでは、「モナ・リザ」とは一体誰を描いたものか、レオナルド自身は何も記述していないので、多くの研究家はそのモデルを探して今日に至っている。これまでのところ、ブランリによると、ナポリ公妃のコンスタンツァ・ダヴァロス説、上述のイザベラ・デステ説、突飛なのは女性にみだた自画像説など、10余りの説があるという(ブランリ 1996)。NHKテレビで「モナ・リザ」のことが放映されたことがある(平成12年8月16日、「モナ・リザ」なん

であなたは名画なの?」)。その番組で、元ニューヨーク近代美術館のアメリカ・アレナスの解説では、結局、それは実在の人物ではなく、レオナルドの理想の女性像を描いたものであろうと述べている。他の著書(下村 1974, 中山 1989, 瀬木 1998)でも同様の主旨が述べられており、「モナ・リザ」とは現実の女性を描いたのではないのではないかとするのが、最近の傾向のようでもある。

3. 「モナ・リザ」のモデルは実在の女性という“証拠”

1) 「モナ・リザ」のモデルは実在の人物

上述したように、「モナ・リザ」はレオナルドの理想の女性像を描いたのではないかという考



図1 「モナ・リザ」の顔の部分。鼻根部の左側で、眼の内側に何か小さな皮膚所見、皮疹(exanthema)が描かれている。



図2 皮疹のある左眼の部分拡大した写真。2つの疣(いぼ)のようなものが癒合した形をしている。

え方があるが、筆者は最近、「モナ・リザ」のモデルは架空の女性ではなく、やはりそれは実在の人物であり、そのモデルは自分の母親ではないかという、ある“証拠”を発見した。

「モナ・リザ」の絵は2度見たことがある。この絵は昭和39年に日本に来たことがあり、上野の国立博物館で展示された時と、国際会議でヨーロッパに行ったおり、パリのルーブル美術館で見ている。どちらでもガラス越しに展示され、数メートル離れた所から見るようになっており、間近で見ることができないので気がつかなかったが、前記したNHKテレビでこの絵が大写しになった画面を見て気がついた。「モナ・リザ」の顔の左内眼角と鼻根部との間に、ごく小さな盛り上がり、疣(いぼ)か、ほくろのような何かの皮膚所見、皮疹(exanthema)が描かれているのである(図1, 2)。

2) 「モナ・リザ」の顔に描き込まれた皮疹

この「モナ・リザ」の顔の皮疹について、そのことに気がついている人は世間でも少なくないと考えられる。ここで筆者が“発見”したというのは、ラファエロ・ラファエル(1483～1520)がこの「モナ・リザ」の絵か、その下絵と思われるものをペンでスケッチしているのであるが、驚くべきことに、このラファエロも顔の同じ部位にまったく同じようなものを描いているという“発見”である。普通の画集などでは絵が小さいのではっきりしないが、これも同じくNHKテレビ番組の大写しで見て初めて気づいた。しかも、それは左内眼角部の一カ所だけでなく、どうも両目の下瞼辺りにも、それらしきものが描かれている(図3, 4)。

仙台市の牧野好夫博士(皮膚科開業)は筆者の大学時代の同級生なので、「モナ・リザ」の絵と、NHKテレビを録画した大写しの画面を写真に撮って見てもらった。

同博士によると、「どうも半米粒大と粟粒大の大小2個の丘疹からなっているようである。色は正常皮膚色(化粧している場合も考えなくてはならない)。表面は平滑。丘疹か小結節という



図3 ラファエロが1505、6年頃に「モナ・リザ」の絵をペンでスケッチしたといわれる絵である。ポーズは同じであるが、背景や顔つきなどが異なる。現在の「モナ・リザ」の以前に描いた絵をスケッチしたのではないとも言われる。



図4 ラファエロがスケッチした絵の顔の部分拡大した写真である。この絵でも、同じ部位に同じようなものが描き込まれている。

べきか。母斑の一種かもしれない。とにかく何らかの皮疹ではあるが、形や部位、それが片側だけということからも、いわゆる眼瞼黄色腫は否定的である。地元の皮膚科専門医グループでも検討したが、全員同意見であった。なお、ラファエロのスケッチも見たが、絵だけから確定診断はつけられない」と言うことである。

目のふちによく見られる皮膚所見に眼瞼黄色腫と呼ばれるものがある。これは壮年期にみら

れるもので、脂質を含んだ細胞が皮膚の中に集まって生じたもので、黄白色で扁平の盛り上がりである。普通、両側のとくに上眼瞼に現れる。皮膚科専門医の意見で、「モナ・リザ」に見られる皮膚所見はこの眼瞼黄色腫ではないということは、それが必ずしも中年になってから現れたものとは言えず、すでに若い頃から存在していたともいえるのである。

3) 「モナ・リザ」のモデルは誰か

とにかく、「モナ・リザ」のモデルがもし架空の人物であれば、顔にわざわざこのような皮疹などを描き込むはずはないであろう。また、ジョコンド夫人にせよイザベラ・デステにせよ、他人から依頼された肖像画であれば、顔のいぼとかあざのようなものは、ことに女性の場合には描かないであろうし、もし描いてもそれは目立たないように描くはずである。それを、ラファエロのような第三者が描き写しているということは、レオナルドはその女性の特徴として、むしろ意図的に描いたと考えられる。

それは多分ごく身近な人間と考えられるが、レオナルドには恋愛関係の女性がいたという記録はなく、結婚の経験もなく、年齢相当の姉妹もおらず、そうすると自分の母親が最も考えやすいであろう。すなわち、彼が絵に皮疹を描き込んでいるという事実は“母親説”を考えるための“証拠”にならないであろうか。

4. 「モナ・リザ」のモデルの“母親説”

1) 「モナ・リザ」のモデルは母親か

母親が「モナ・リザ」のモデルとすると、レオナルドが後年に母親と再会する機会があったかどうか、その当否を決める大きな鍵になると考えられる。

「モナ・リザ」の絵が描かれた制作年代は1500年から1506年と言われているが、その根拠になるのは、ラファエロがこの絵をスケッチしたのが1505～1506年ということから推定されたと言われる。レオナルドは1482年から

1499年の間、ミラノに住んでいたことがある。1493年に、カテリーナという女性が彼の元に身を寄せており、その2、3年後にその女性が死亡し、葬式を出したという記録がある（足立1943、杉浦1958）。その女性がレオナルドの母親ではないかと想像されているのであるが、この頃に描かれたとすると、当時、レオナルドは41、2歳、母親とすると63、4歳ということになる。そうなると、「モナ・リザ」のモデルとしてはいささか年をとっているのではないかということになる。しかし、考えてみると、レオナルドにとって年老いた母親を若く美しく描くなどということは容易なことであろう。

レオナルドが女性を実際よりも若く描くという例は他にもある。レオナルドが最後まで携えていた3点の絵のうちの1点に「聖アンナと聖母子」がある。それは幼子イエスに手を差し伸べる聖母マリアの親子を、イエスの祖母に当たる聖アンナが後ろから微笑んで見ている絵であり、それはルーブル美術館にある。この絵で祖母の聖アンナは、聖母マリアと年の差を感じさせないほどに若く描かれており、「モナ・リザ」の絵でレオナルドが年老いた母の姿を実際より若く描いても、少しもおかしくはないと考えられる。その意味では、確かに彼は理想の女性像を描いたと言えるかもしれないが、その原点はやはり自分の母親ではないだろうか。

2) カテリーナという女性

ここでレオナルドが後年に母親に会ったことがあると考える根拠は、『レオナルドの手記』に基づいている。彼の手記に「1493年7月16日、カテリーナが来た」と書いている（足立1943、杉浦1958）。ここではカテリーナと書いているが、生みの母を「お母さん」とではなく「カテリーナ」と呼ぶように習慣づけられていたのかもしれない。息子たちに先立たれ、おそらく寡婦となり、身を寄せる所を探してレオナルドを頼ってきたと考えられる。レオナルドが何十年ぶりかでカテリーナと名乗る女性に直面した時、幼い頃に見た母の顔の記憶が蘇り、

「やっぱりカテリーナ（母）だ」と知ったその感慨を、彼は「モナ・リザ」の絵に描き込んだのではなかろうか。

若い頃のカテリーナはさぞ美人であったろうと想像される。かつての恋人との間に生まれ、今や大成したわが子を前にしたとき、その嬉しさと恥ずかしさ、そして誇らしさを湛えた“モナ・リザの微笑”は、こうして生まれたのではなかろうか。背景は山岳風景になっているが、ラファエロがスケッチした絵では教会の回廊の柱が描かれており、最初はそのような構図のものであったと考えられる。「モナ・リザ」のモデルは黒いヴェールを被っている。親子で教会に祈りを捧げに行った折にでも描かれたのだろうか。

ところで、カテリーナが住んでいたと思われるヴィンチ村の辺りから、当時レオナルドが住んでいたミラノまで、およそ300キロの距離であり、それは東京から名古屋の距離である。わが国でも、その昔、人さらいに連れ去られたわが子を探して、京から東国の隅田川まで旅をした母親の話がある。カテリーナという女性は旅の疲れからか2年か3年後に死亡し、レオナルドの手記によると、彼はその葬儀に4人の司祭と4人の助祭を頼んでいる（足立1943、杉浦1958）。

5. 従来の“母親説”

「モナ・リザ」の絵を母親と関連づける説はこれまでもないわけではない。まず、精神分析家のフロイドが、この「モナ・リザ」について、レオナルドの幼年期における母親の思い出をその微笑に感じさせると述べており、さらに前記の「聖アンナと聖母子」で、聖アンナに生母カテリーナを、聖母マリアに育ての親アルビエーラを対比させている（フロイド1953）。彼はここで「モナ・リザ」の絵のモデルが母親であるとは言っていないが、その当時はヴァザーリの「ジョコンダ説」が定着していたからではないかと考えられる。

はっきり“母親説”を述べるのは、フランスの美術史家・美術批評家のセルジュ・ブランリ（ブランリ 1996, Bramly 1995）と考えられる。このたび冒頭に、レオナルドがモデルになった「ダビデ像」と、「モナ・リザ」が似ていることを述べたが、この印象は筆者ばかりではないようである。ブランリは「『モナ・リザ』がその作者に似ていることはよく言われることである。それにしても、なぜ素直に死後に描いた母の肖像画とされないのだろうか」と述べている（ブランリ 1996-a, Bramly 1995-a）。その他に“母親説”がないかインターネットでも検索してみたが見付からない。現在のところ最も新しく、よく売れている書として、ミラノ工芸大学教授で「最後の晚餐」の修復の指導をしているマラーニの著書（Marani 2000）も取り寄せてみたが、「モナ・リザ」と彼の母親のことに關しては何も触れていない。マラーニは従来の「ジョコンダ説」を述べているが、そのことについては深く触れていない。どうして“母親説”が出ないのか、その理由を以下に考えてみることにする。

6. “母親説”が出ない理由

1) レオナルドの母親との再会

レオナルドが母親と思しきカテリーナという女性にミラノで会うという話をフロイド、田中英道、ペイン、ブランリらが紹介している。その根拠は、先にも述べたレオナルドの2つの手記によっており、それは「1493年7月16日、カテリーナが来た」という手記と、そのカテリーナという女性が死んで、その埋葬に使った費用の記録である（足立訳 1943, 杉浦訳 1958）。その埋葬費の費用とは以下のようなものである（フロイド 1953）。

[カテリーナの埋葬費]

死から埋葬までの諸費用	27	フロリン
ろうそく2ポンド	18	”

十字架運搬および建立費	12	フロリン
棺台	4	”
棺担ぎ人夫代	8	”
司祭4名助祭4名に	20	”
鐘つき代	2	”
墓堀人夫代	16	”
許可証のために役人に	1	”
計	108	”
医者に	4	”
砂糖およびろうそく代	12	”
計	124	”

しかし実は、ここに出て来るカテリーナという女性がいったい何者かの議論がある。本邦の古い出版物『レオナルド・ダ・ヴィンチの手帳』（足立訳 1943）では、「カテリーナとはレオナルドの家政婦の名である」となっており、その後の出版物『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』（杉浦訳 1999, 第1版 1958）でも「カテリーナとは女中かそれともかれの生母か、明らかでない」と述べられている。ブランリによると、このカテリーナという女性について、それが母親とする説、使用人であるとする説、この問題には触れないという立場と、いろいろあるという（ブランリ 1996）。

しかし、そのことについて、フロイドは他書を引用して、以下のように述べている。「これは当時41歳の息子を訪ねるために1493年ミラノにやってきたヴィンチの貧しい百姓女、つまりレオナルドの実母である。彼女はそこで病気になって、レオナルドによって病院へ入れられた（注、フロイドによると「病院にカテリーナを見舞う」という手記があるらしい）。そして死んだ時は、彼によってかくも丁重に費用をおしまずに埋葬せられたのである」と（フロイド 1953）。このようにフロイドはレオナルドが母親に会ったと言う考えで論述している。

また田中は「このカテリーナがいったい誰であるか多くの議論があるが、実母カテリーナで

あることはほぼ間違いないだろう。……死を間近にした老婆が故郷から一目、高名なる画家の息子を見にやってきたと考えられる」と述べている（田中 1978）。

イギリスのロバート・ペインは次のように述べている。「……カテリーナの埋葬費のほぼ3分の1はろうそくに費やされている。レオナルドが下女にそれほど多くを費やしたとは思えないし、またこんなに大勢の司祭や助祭を埋葬に立ち合わせる費用をまかなうとも思えない。……彼が心にかけていたことの分かっているカテリーナという名の唯一の女性は母親だった。その母親がミラノにいる息子を訪ねたとしても、またそこで病気になり、病院にはいったとしても、別に驚くにあたるまい。……」（ペイン 1982）

さらに、セルジュ・ブランリもこの女性はレオナルドの母親と考えている。もっとも、ブランリによると、この葬式はむしろ質素な方であり、ブランリが想像するには、レオナルドは自分の出生や年老いた母親の素性を人に明かしたくなかったからではないかと考えている（ブランリ 1996）。

筆者も考えてみるに、家政婦が来たことをわざわざ手記に書き、その家政婦のために葬式を挙げたりすることがあるだろうか。自分の親の葬式でもなければ、上述のようにその出費を事細かに記録を残す必要はないであろう。一旦、合計を108フロリンと計算しておきながら、さらに後から思いついて、医者への支払いや、ろうそく代などを追加して計算しているのを見ると、それが自分の親に関するものなので、ことさら詳細に記録したのではなかろうか。こう考えると、このカテリーナという女性はやはり母親と考えるべきであり、レオナルドが後年、自分の実母に再会し、その折に「モナ・リザ」を描いたと考えてはどうだろうか。

なおついでに、レオナルドは「最後の晩餐」を、ミラノにあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の壁に描いており、これはミラ

ノ滞在の終わりの頃と言われている。時期的に母の死後に制作したといえよう。そして、彼がフィレンツェに戻ったときにラファエロが「モナ・リザ」をスケッチしているので、すでにミラノで「モナ・リザ」に着手していたと考えるべきではなかろうか。

2) レオナルド出生のフロイドの研究

ブランリによると、レオナルドが非嫡子であり、かれの生涯における決定的な問題を初めて明るみに出したのはフロイドであるという。フロイドはもちろん美術専門家ではない。ユダヤ人であるため、大学など公職のポストにはつげずウイーンの街で開業医をしていた。かれはレオナルドに関する論文を書いているが、それは極めて難解な精神分析の論文であり、当時からことにヨーロッパでは受け入れられなかったと考えられる。本来の精神分析の研究にしても、フロイドのことが世界中で知られるようになったのは、スタンレー・ホールの招きでアメリカの大学で講演の機会が得られてから以後のことといってもよいであろう。

同じような理由から、フロイドのレオナルド・ダ・ヴィンチに関する論文も、世間で知られることはなく、また知られたとしてもユダヤ人の精神科医が書いた論文などは、美術史界では無視されたのではないかと考えられる。そのようなことからレオナルドの生い立ちのことについては、一般にはあまり知られることがなかったのでないかと考えられ、カテリーナという女性についてもそれが誰のことか分からなかったのではないかと考えられる。カテリーナが使用人であろうとする説は、彼が「カテリーナ」と書き、「母」としていないのがその理由のひとつのようであるが、彼の生い立ちのことを考えると、「母」と呼ばないで「カテリーナ」と呼んでいた理由が理解されるであろう。

3) 本邦の『レオナルドの手記』の解釈

上に述べたように、フロイド、田中、ペイン、ブランリなどの著作では、レオナルドが実母に再会したであろうと述べているが、それらの著作

はほとんど翻訳物であり、田中の著作は本邦ではむしろ例外的である。本邦での多くの著作は、生みの母はレオナルドが幼年期に別れ、その後の消息は不明というとらえ方をしている。『手記』の訳書では、カテリーナという女性は「女中かそれともかれの生母か明らかでない」（杉浦訳 初版 1958）という説明がされているが、それは多分、レオナルドの手記が発見された頃、外国の学者がそのように解釈したものを本邦ではそれを踏襲し、それがそのまま現在にいたっていると考えられる。

すなわち、フロイドの論文が高橋によって訳されたのは 1953 年である。足立訳の『レオナルドの手記』は 1943 年の出版であり、高橋訳が出る以前のことである。杉浦訳の『レオナルドの手記』は初版が 1958 年であるが、その原稿が書かれたのはその 10 年以上も前のことであるといい（杉浦 1999）、初版以来、そのまま現在にいたっていることになる。

なお、「モナ・リザ」のことにについて詳しい下村は、フロイドのことに触れてはいるが、その論文は引用文献には入っておらず、カテリーナという女性のことにしても述べられていない。その点、田中は、フロイドがレオナルドの母と「モナ・リザ」や「聖アンナ」との関連を述べた上述の論文を引用しており、またカテリーナという女性が実母であろう述べている。それにもかかわらず、なぜ「モナ・リザ」のモデルが母親かもしれないと考えないで、「イザベラ・デステ説」をとったのか理解できない。



最後に、学生が興味のあることを調べて書くという授業は、東大で立花隆も行っていることを新聞で知った。学生時代に、ある人物についての本を読んだり、レポートを書くということは、将来に何かと役立つと思われる。この「人間学」のレポートは 2 年生の授業であり、男子学生では織田信長、坂本龍馬、野口英世、田中正造などが取り上げられ、女子学生ではヘレン・ケラー、マザー・テレサ、ナイチンゲールなど

が多く、「ベルサイユのバラ」のせいカマリー・アントワネットも目についた。3 年生の「精神保健Ⅱ」（選択）の授業では、自分の書いたレポートをもとに「考察」を行い、文献を追加し、パソコンで論文の形にしてもらった。学生の文章には 2 度、3 度と手を入れたが、筆者にとっても自分でよく知らない人物について学ぶことができた。

ところで、ドイツ語で書かれた論文を読むのは、世界でもドイツ人以外では、日本人くらいのものであろうか。今、考えてみると、「モナ・リザ」の“母親説”を思いついたのは、筆者が大学院生時代に、勿論、翻訳物であるが、フロイドの著作を読んでいたことが記憶のどこかに残っていたからかもしれない。

[要約]

イタリアの画家、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた有名な「モナ・リザ」のモデルは、フィレンツェのフランチェスコ・デル・ジョコンドという人の妻で、モナ・リザという名前の女性と考えられ、この絵が「ラ・ジョコンダ」とか「モナ・リザ」と呼ばれてきた。しかし、今日、「モナ・リザ」のモデルについては多くの説があり、最近ではレオナルドは現実の女性を描いたものではなく、むしろ彼は理想の女性像を描いたのではないかと考える説もある。

しかし、筆者はレオナルドはやはり現実の女性を描いたのであると考えている。というのは、ごく最近気がついたことであるが、この「モナ・リザ」の顔、すなわち、鼻根の左側と左目の内側との間に、ごく小さな疣（いぼ）のような皮膚所見、皮疹（exanthema）が描き込まれているということである。この事実はレオナルドが単に理想の女性を描いたのではなく、現実の女性を描いたという“証拠”になるのではないかと考えている。

レオナルドがミラノにいた頃、1493 年に、カテリーナという女性に会っており、その女性がレオナルドの母親と考えられている。この頃

に彼は自分の母親をモデルにして描いたのではないだろうか。もっとも当時、彼は41歳か42歳であり、母親とすれば63歳か64歳ということになる。もし、母親がモデルがとすれば、もっと年をとっているのではないかと考える人もあろう。しかし、レオナルドにとって、年老いた母をより若く美しく描くなどということは極めて容易なことと考えられる。“モナ・リザの微笑”とはこうして生まれた彼の“母親の微笑”ではなかろうか。

Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci, 1910)『フロイド選集, 第7巻, 芸術論』日本教文社, 1953(第1版)。

- 16) Pietro C. Marani: Leonardo da Vinci, The Complete Paintings, Harry N. Abrams, Inc. 2000.
- 17) 森村泰昌『踏み外す美術史 私がモナ・リザになったわけ』講談社現代新書, 1998。
- 18) ロバート・ペイン, 鈴木主税・訳『レオナルド・ダ・ヴィンチ』草思社, 1982。

(平成13年4月11日受付, 平成13年6月12日受理)

【参考・引用文献】

- 1) 足立 重・訳『レオナルド・ダ・ヴィンチの手帳』六興商会出版部, 1943。
- 2) アレッサンドロ・ヴェッツォシ (高階秀爾監修) 『レオナルド・ダ・ヴィンチ 真理の扉を開く』創元社, 1996。
- 3) 一條貞雄: モナ・リザのモデルは誰? 仙台市医師会報 第438号, p39-40, 2000; 日本医事新報 第4030号, p55-59, 2001。
- 4) 久保尋二: レオナルド・ダ・ヴィンチ, 『世界美術大全集, イタリア・ルネサンス 2』, 小学館, 1994。
- 5) 下村寅太郎『モナ・リザ論考』岩波書店, 1974。
- 6) 杉浦明平・訳『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(下)』岩波文庫, 1999(第1版1958)。
- 7) 瀬木慎一『レオナルド・ダ・ヴィンチ 伝説と解説』ニュートンプレス, 1998。
- 8) 田中英道『レオナルド・ダ・ヴィンチ 芸術と生涯』新潮社, 1978; 講談社学術文庫, 1992。
- 9) 中丸 明『モナ・リザへの旅』集英社, 1998。
- 10) 中山公男『レオナルドの沈黙』小沢書店, 1989。
- 11) 西岡文彦『2時間のモナ・リザ』河出書房新社, 1994。
- 12) ジョルジョ・ヴァザーリ, 平川祐弘・小谷年司・田中英道・訳『ルネサンス画人伝』白水社, 1982。
- 13) セルジュ・ブランリ, 五十嵐見鳥・訳『レオナルド・ダ・ヴィンチ』平凡社, 1996; a) p.442。
- 14) Serge Bramly: Léonard de Vinci, Jean-Claude Lattès, 1995; a) p.399。
- 15) フロイド, 高橋義孝・訳: レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の一記憶 (Sigmund Freud: Eine